伝統芸能「北海道」のあゆみ

尺八篇その16

新興邦楽会に活路を求めて

中島聖山

肺機能回復を願い尺八を吹く

唯是家は岩手県遠野市の出で、唯是想山の父が北海道に移り住むまで、代々遠野に住んでいた。弘前市の東欧義塾で勉学に励んでいた想山の厳父は、学友から中国に伝わる民族楽器の洞簫を習った。厳父は生涯洞簫を離すことなく、折りを見ては吹いていた。そんなこともあり、想山は幼少の頃から、尺八の音色に良く似た洞簫を聞いて育った。

若い頃から土木技師を志していた想山は、父の手伝いをしながら田畑の測量などをしていた。体格のわりには弱かったのであろう。十六、七歳の頃、過労が原因で肺を冒され、闘病生活を余儀なくされた。療養のため二年ほど定職を持たない日々が続いた。病気療養とはいえ、若い体を家中に置いて、さぞかし憤懣やるかたない毎日であったろう。

ある日のこと、月参りにきた僧侶から、肺機能回復のリハビリとして尺八吹奏を勧められた。別に習いもしなかったが、門前の小僧で、小さい時から父の洞簫を鳴らせた想山は、早速尺八を買い求めて、独学で吹き始めた。青春を賭けて夢中になれるものと出会ったかのように、その後、想山は尺八の稽古に精進する毎日となった。

何をするにしても日常生活は、すべて右利きだった想山が、なぜか尺八だけは左ぎっちょで吹いていたという。想山の吹いていた尺八は太くて大きな音を出すことで有名だったが、最後まで愛用した銘管は柳水作と如水作の二管だった。

尺八吹奏による効用であろうか、体力を回復した想山は、それまでの希望通り土木技師となって身を立てることになった。国を挙げて北海道開拓に力を入れていた時代だっただけに、多忙を極め、仕事がら道内各地へ出張することが多かった。

ある日のこと仕事で岩見沢へ出張した時、どこからともなく美しい箏の音が聞こえてきた。短い北国の夏のこと。窓を開け放して弾いていたのであろう。尺八を吹く想山にとって、出張先で聞いた箏の音は、ことのほか強く心の底に残ったであろう。あいにくその時は尺八を持っていなかったことから、はやる気持ちを押さえて深川に帰った。

旅先で聞いた美しい箏の音を忘れることが出来なかった想山は、次回の岩見沢出張を心待ちにしていたであろう。間もなく待ちに待った岩見沢出張がめぐってきた。その日、唯是想山は鞄に愛管を入れて家を出た。そして、記憶をたどって箏の音がした家を訪ね、初対面ながら合奏を願い出た。この出会いが縁となり、山田流の先生が二人のなかを取り持ってくれ、菊枝さんと夫婦の契りを結ぶことになった。

病後の体力回復を願って始めた尺八が、伴侶との出会いを生み、唯是想山のその後の人生を大きく左右することとなるのである。

都山流に入門

ある日のこと、唯是想山は旭川市内の楽器店「きりや」で、偶然伊藤薫（後の彩山）と出会った。伊藤薫は大正六年正月頃から、旭川在住で琴古流河本派の境という人物に尺八の手ほどきを受け、出会った当時は相

—創造する映像集団— Something out of Nothing

円グループは

ひとりぼっちの人間が個人の尊敬、自由、
生活を守るためにつくられた人間集団です。

PROJECT ZERO

円グループ代表　渡辺順一

札幌市西区24軒3条2丁目4番12
琴似グランドハイツ210号
TEL 644-1876
スタジオ TEL622-4688

当吹けるようになっていた。それまで互いに独学同然だったから、初対面ながら尺八の話に花が咲き、すっかり意気投合してしまった。恐らく二人は最良の友を得た心境になったであろう。以来二人は市内の糸方社中を、連れ立って合奏して回ったという。

丁度その頃、唯是想山は都山流宗家の中尾都山など、関西で活躍する尺八の名手が来道することを知った。それは、北大水産学部の中野長俊や歯科医師の西風福一らが中心となって組織した、札幌篁会の演奏会に特別出演する新聞記事だった。早速、唯是想山は竹友の伊藤薫を誘い、二人で演奏を聴きに札幌まで行こうと計画した。しかし、大正九年一月二十五日、演奏会当日になって伊藤薫の都合が悪くなったため、唯是想山は高鳴る気持ちを押さえて、一人深川から汽車に乗って札幌に向かった。

この時、初めての北海道公演となった中尾都山は、自作の本曲「岩清水」と「夜の懐」を独奏したほか、「朝風」を同行した畑中康山と連管した。宗家中尾都山や畑中康山の舞台演奏を聴いた唯是想山は、深い感動を覚えるとともに、都山流尺八を極める決意を固めた。

札幌の尺八愛好家達の強い要望を受け、演奏会終了後も畑中康山が札幌に踏みとどまって、都山流の専門師匠として教授を開始するという情報を得た唯是想山は、すぐに入門の許しを願い出て、深川から稽古に通い始めた。当時はまだ交通機関が充分に発達していなかったから、毎週稽古に通うことは大変な苦労が伴ったであろう。

稽古に通い始めて半年程たった大正九年八月、唯是想山は札幌から恩師畑中康山を招聘し、深川劇場で小さな演奏会を開催した。この時には、札幌で行われた篁会の演奏会を聴くことの出来なかった伊藤薫も、唯是想山の誘いを受け客席に来ていた。宗家中尾都山の命を受け、北海道唯一の専門師匠として活躍していた畑中康山の演奏を聴いた伊藤薫は、深い感銘を受けるとともに、楽屋を訪ねてその場で入門を願い出た。

畑中康山は初対面ながら、唯是想山の竹友と聞いて、快く入門を許した。こうして伊藤薫も唯是想山に半年遅れて、都山流の流人となることが出来た。その後は既に門弟として唯是想山が深川にいたこともあり、畑中康山が旭川へ出稽古し、旭川方面の地盤作りが始まった。

このようにして兄弟弟子となった二人は、旭川地方の都山流普及に大きな業績を残すとともに、互いに双璧として芸の道に精進し、康琳会幹部としての力量を充分に発揮した。

夢を抱いて旭川転居

念願の土木技師になって道内各地を駆けめぐる日々を送っていたものの、箏を教える妻をめとったこともあり、専門師匠として活躍する畑中康山を目の当たりにした唯是想山は、次第に邦楽の世界にのめり込んでいった。大正十二年七月の中尾都山・中島利之（後の生田流正派邦楽会家元の中島雅楽之都）ら一行の旭川巡演を契機に、専門師匠への夢は更にふくらんでいった。大正十四年、唯是想山は夫婦力を合わせて邦楽の道を極めることを決意し、道北の拠点都市として栄えていた旭川へ転居した。旭川に移り住んだ唯是想山は、五条通十丁目の自宅に尺八教授の看板を掲げ、本格的な教授を始めた。

都山流は大正十五年二月に創始三十周年を迎えた。全国各地で記念事業が展開されたが、北海道では伊藤彩山や唯是想山らが中心となり、三月二十日に旭川商工会議所で祝賀記念演奏会を開催した。道内唯一の記念事業となったこの会には、畑中康山が特別出演し華を添えた。

その後、唯是想山は土木技師の技術を活かして、旭川第七師団に勤務することとなった。仕事柄昭和二年には、旭川の近郊にある近文陸軍官舎に転居した。師団司令部の土木技師となって、確固たる生活基盤を得た唯是想山は、尺八教授にも力を注いだ。その手始めとして、門人星野想波が経営する明治屋の二階を借り、康門想琳会の看板を掲げた。中島幹山が入門した昭和二年十二月には、二十人を越える門人が集まり、旭川でもっとも勢力のある社中として栄えていた。

その頃、旭川では師範の伊藤彩山を筆頭に、指南の唯是康想・皆川彩峰・根元霊波・富沢康碧などが活躍していた。国家公務員のアルバイトが固く禁じられていたこともあり、社中が余りにも急激に勢力を伸ばしたことから、陸別で開業医をしていた門人宅に身を寄せたこともあった。

准師範に昇格し想山を名乗る

精力的な門人育成と積極的な組織拡大への取り組みなどの業績により、唯是康想は昭和三年六月十五日付けで准師範に昇格して想山を名乗った。六月二十六日に旭川商工会議所のホールで昇格披露を行ったが、この会には宗家中尾都山始め糸方の中島利之などが特別出演した。というのも中尾都山一行が六月二十三日に札幌市公会堂で行われた、都山流第十八回特別演奏会に出演のため来道していたからである。

演奏会は中尾都山の指揮による、地元流人達の本曲「若葉」の演奏で始まった。唯是想山は満席の聴衆を前に、中島利之の箏で、宮城道雄作曲の「比良」を演奏した。宮城新曲は唯是想山の得意とするところでもあり、准師範昇格披露とあって万雷の拍手を受けた。

こうして短期間のうちに数少ない職格者の一人となった唯是想山は、門人の育成と都山流の普及発展になお一層精力を傾注した。昭和三年十一月十八日には、札幌から恩師畑中康山を招聘し、地元尺八界の先輩伊藤彩山の賛助出演を得て、旭川実科高女講堂で想門康琳会の第一回演奏会を開催した。尺八指南を開始した昭和二年当時は、康門想琳会の看板を掲げ、畑中康山門を明示しつつも、独立した想琳会を全面に打ち出していたものが、准師範昇格に伴って康琳会に吸収された形となった。このあたり

優雅な邦楽の音づくりにご奉仕する

邦楽〈琴・三絃〉の店

川村樂器店

札幌市中央区南3条西2丁目（HBC三条ビル）☎(代)221-4970

■営業時間／午前10時～午後7時／月曜定休日

●各種カードをご利用下さい。

から康琳会の組織拡充を狙う畑中康山と、自由闊達に音楽活動を展開しようと希望に燃えていた唯是想山との間に、亀裂が生じる兆しが見えていたように感じられる。

組織運営の面は別にして、唯是想山の音楽性は高く評価されていた。その証拠に昭和四年四月二十九日に、札幌の今井記念館で開催された康琳会の演奏会には、伊藤彩山とともに旭川を代表して出演している。唯是想山は体格がよかったこともあり、物干し竿ほどもある太い尺八を吹いていたという。彼が和室で尺八を吹くと、障子がブルブル鳴ったという話まで伝わっている。唯是想山は尺八演奏だけでなく、音楽理論にも通じていた。また、三絃やバイオリンなどの楽器も演奏できた。特に三絃は相当な腕前で、「ままの川」程度の曲であれば、自分で三絃を弾いて門人たちに合奏練習させることが出来た。

新興邦楽会の設立

こうした唯是想山の恵まれた体格に支えられた豊かな音楽性と天分により、その後の北海道の都山流を背負って立つやに見えたが、本曲の楽譜を印刷して門人たちに提供したことがきっかけとなり、恩師畑中康山との間に亀裂を生じ、約七年間破門同然の扱いとなってしまった。このことは都山流の普及発展に大きな障害となったことはいうまでもないが、北海道の邦楽界に大きな打撃を与える結果となった。

当時、都山流の本曲は秘曲として扱われ、先生の演奏を聞いて、フレーズごとに門人が写譜する形態で教授されていた。しかし、この方法では能率が悪く、週二回の稽古では思うように進まないことから、多くの門人を育成し流勢を早期に拡大することは出来なかった。そこで唯是想山は門人たちの写譜を省力化し、稽古の効率化を図ろうと本曲を石版刷りして門人たちに提供したのである。褒められてしかるべき行為だったが、結果的には恩師畑中康山の怒りを買うこととなり、以来都山流人としての活動の道を閉ざされる結果となった。やむなく唯是想山は妻の菊枝と協力して、新興邦楽会を組織し独立することで、尺八を吹き続けようとした。

昭和四年春、仕事の関係で札幌に転居した唯是想山は南九条西七丁目の久保邦山宅筋向かいに移り住んだ。北の都・札幌への転居を契機に、唯是想山の音楽活動はさらに活発になっていった。しかし、活動すればするだけ師匠との亀裂は、次第に大きくなっていった。こうした苦境にあえぐ唯是想山を理解し強く支持する動きが、小樽にあった。唯是想山を講師にして、定期的に研鑽を積んでいた金森剛山を中心にした小樽都山流尺八研究会は、昭和四年五月二十二日に小樽市公会堂で発表会を開催した。この会には地元糸方の吉川・北川社中が賛助出演し華を添えた。研究会の発会披露を兼ねたこの演奏会で、唯是想山は得意の本曲「岩清水」を独奏し、集まった聴衆に深い感銘を与えるとともに、その実力を示した。

唯是想山が恩師畑中康山と訣別し、新たな道を決意したのは昭和五、六年ではないだろうか。この時畑中康山は、以降都山流の免許状を取得出来ないことを理由に、唯是想山の門人だった浅地康楠と東野渓雨山に康山門への転門を強要したという。当時、浅地康楠は札幌専売公社の社長をしていて、地域の有力者として大きな影響力を持っていた。

昭和六年夏、北十一条西一丁目に転居した唯是想山は、新興邦楽会を設立し、新たな気持ちで活動を開始した。昭和十年二月十八日に唯是想山は、今井記念館で新興邦楽会の演奏会を開催した。この時、唯是想山は十一歳だった長男の震一に箏を弾かせ、宮城道雄作曲の「春の海」を演奏した。長男震一とは、数々の名曲を作曲し、アメリカのカーネギーホールでリサイタルを開催するなど、世界的に有名な生田流正派邦楽会の唯是震一のことである。また、翌昭和十一年六月十三日には新興邦楽会として、唯是想山・菊枝・禮子(後の中島利之夫人)の三人が、新日本音楽をNHK札幌放送局からラジオ放送した。この頃が新興邦楽会の隆盛期であり、盛んな演奏活動を展開していた。

晩年は作曲活動に没頭

昭和十三年室蘭に転勤となった唯是想山は、その後三、四年単身赴任の生活を続けた。この頃、室蘭で活躍していた唐牛錦山や糸方の槇尾操先生と親交を深めたという。

札幌に戻った唯是想山は、道職員として中島公園近くにあった治水事務所で製図の仕事をしていた。昭和十七年正月、唯是想山と長男震一の父子は、二人連れだって小樽を訪ねた。この時、想山は息子の震一に、必ず小樽商大に入学し勉学に励むよう伝えたという。帰路二人は糸方の山内雅暁先生(現在は息女の雅楽暁が後継となっている)宅に立ち寄り、何曲か合奏した。

昭和十六年までに新興邦楽会の会員は、三百六十名に達した。晩年唯是想山は作曲活動に力を注いだ。余市町で一般公募した「復興音頭」では、見事入選しレコードの制作も行った。この「復興音頭」を学ぶため、余市の芸者衆が大勢想山宅に来て、隣近所の人々を驚かせた。これが縁となって、「余市小歌」も作曲を依頼された。久本玄智原作の「春の恵」のオーケストラ化を未完のまま、昭和十七年不帰の人となった。

舞踊小道具
舞台美術
近江屋
札幌市東区北36条東4丁目
☎ (011) 731－6866

伝統芸能「北海道」のあゆみ

尺八篇その17

北の大地に根づいた荒木派の芸風

中島聖山

琴古流荒木派に関しては、既に本誌第二十三号で、昭和に入ってから札幌を中心に活躍した高橋渉童を通じて述べたが、それは四世荒木古童とのつながりに過ぎなかった。高橋渉童より十年以上も前から、三世荒木古童に師事し、本道で活躍していた人物がいた。その一人は函館で楽器商を営んでいた長谷川羊童であり、もう一人は逸童派から転門した釧路の室井琢童である。

今回はこの二人の内、最も早くから荒木派を極め活躍していた長谷川羊童に焦点を当て、北海道における荒木派の創成期に触れてみることにする。

故荒木古童師（雑誌「三曲」昭和10年6月号より転載）

三世古童を招聘して演奏会

長谷川羊童は明治二十八年十一月五日函館に生まれ、本名を権九郎といった。明治四十三年十五歳のときに三世荒木古童に師事して、琴古流尺八を学び始めた。荒木古童への入門の動機や、手ほどきを受けた場所などは定かではない。

ある程度吹けるようになった長谷川羊童は、荒木古童が主宰する童窓会の下部組織として、童窓会函館支部を設立した。これは当時本道に存在しなかった荒木派の拠点作りであり、支部開設は童窓会組織の北方拡大に大きな意味を持った。更に長谷川羊童は支部とは別に、社中の組織として「竹友会」を設立した。中央に対しては支部、そして地元とのつながりでは社中というように、長谷川羊童は二つの組織を上手に活用して荒木派の普及発展に努めた。今では当たり前のことだが、当時としては先駆的な考えだったに違いない。

門人の数が次第に増え、社中の基盤も整った大正十一年、長谷川羊童は恩師三世荒木古童を招聘して、念願の演奏会を開催した。八月十二日のことであり、会場は函館でも近代建築の代表として知られていた公会堂だった。この時荒木古童は、糸方として山室千代子を同行し「八重衣」を演奏した。山室千代子は唄物を得意とする山田流の箏曲家としてだけではなく、藤植流胡弓の家元としても活躍していた。特に三世荒木古童とは、今井慶松らと移風会を興した同志でもあり、東京の三曲界でもことのほか親交が深かった。この会には近江賀童ほか竹友会の会員二十名程が出演し、北海道に荒木派が立派に根づいたことを世に示す結果となった。

この演奏会の成功は、その後の長谷川羊童の尺八人生に大きな影響を及ぼすこととなった。その一つは道南地方の邦楽愛好家達に大きな反響を呼び、長谷川羊童の三曲界での地位を確固たるものにしたことである。これによって糸方を含めた道南の三曲界で、長谷川羊童は指導的立場を得るに至った。もう一つは荒木古童の評価である。東京から遠く離れた地方にあって、一丸となって活躍する多くの孫弟子たちの熱演ぶりを目の当たりにした荒木古童は、長谷川羊童の指導力と統率力に感銘するとともに、その力量を高く評価した。これが契機となって、毎年東京で開催されていた童窓会の定期演奏会への出演が許されたのであり、長谷川羊童の東京でのデビューの発端となった。

大正十一年夏の三世荒木古童を招聘しての特別演奏会は、以上のように大きな成果を残すとともに、貴重な古童来道の記録となった。

童窓会の定期演奏会に出演

こうして函館での演奏会を契機として、荒木古童に童窓会の定期演奏会への出演を勧められた長谷川羊童は、翌大正十二年の春季定演に出演することを決意した。そして、その後は東京で毎年春秋二回開催されていた童窓会の定期演奏会に積極的に出演した。

大正十二年三月三日、東京丸の内にある有楽座で開催された春季定演に出演した長谷川羊童は、関和童・納富寿童・清水知童・宮内岱童らと肩を並べて演奏した。単身上京して大きな舞台での演奏を無事終えた長谷川羊童は、三月五日美妙社を表敬訪問し、藤田社長に北海道の尺八界の模様を伝えるとともに、今後の抱負を披瀝した。

三世荒木古童を筆頭に、童窓会の幹部が出そろう定演に出演できたことは、長谷川羊童にとって大きな自信となった。また、

優雅な邦楽の音づくりにご奉仕する

邦楽〈琴・三絃〉の店

川村樂器店

札幌市中央区南3条西2丁目（HBC三条ビル）☎(代)221-4970

■営業時間／午前10時～午後7時／月曜定休日

●各種カードをご利用下さい。

会派の幹部として全国的に活躍していた兄弟弟子達の演奏を聞いた長谷川羊童は、強い刺激を受けた。帰函後、長谷川羊童が活発な演奏活動を展開しはじめたのも、そうした体験の現れであろう。その手始めとして社中の充実強化を願い、大正十四年十月十四日、函館市末広町で竹友会の演奏会を開催した。

続く大正十二年十月の秋季定演は関東大震災のため開催されなかった。三世荒木古童の家は震災のとき、向島の火が川越しに飛び火して起こった近所の火災により類焼し、またたく間に全焼してしまった。古童は愛管を持って逃れ一命は取り留めたものの行くあてもなく、その夜は家族とともに近所の野原で一夜を明かしたという。翌日、白髪橋をわたって寺島村の吉田朋吉を尋ね、しばらくそこに身を寄せた。

大正十三年六月十五日、震災後初めて童窓会の春季定演が帝国ホテルの演芸場で開催されたが、この時長谷川羊童が出演したかどうかは分からない。記録として残っているのは、昭和二年春の第九回定演への出演である。大震災により東京における音楽活動が停止する間も、長谷川羊童は函館を中心に、門人の育成や温習会の開催などを行い、社中としての活動を盛んに続けていた。

昭和二年三月長谷川羊童は定演を二か月後に控え、糸方との下合わせのため上京した。五月一日明治神宮外苑の日本青年館で開催予定の第九回定演では、プログラムの最初で「楫枕」を演奏することになっていたからである。当時、童窓会幹部として定演に出演していたのは、後に四世荒木古童を継承した荒木梅旭を始め十七名にすぎなかった。いずれも東京、横浜でプロとして活躍している人物で、地方では浜松市の小池玲童（後に都山流に転門し玲山として活躍）と函館の長谷川羊童の二人だけだった。当日の会券は一等と二等とに区別され、一等は三円、二等は二円で当時としては高い値段で販売された。

続く定演は十月九日、東京数寄屋橋にある朝日新聞社講堂で開催された。この時長谷川羊童は「若菜」を米川親敏の箏、福田喜久子の三絃で演奏した。

古童二度目の訪函

童窓会の幹部として、吹奏の面でも居並ぶプロと対等に活躍するようになった長谷川羊童は、宗家荒木古童を招聘して、二度目の特別演奏会を企画した。

昭和三年八月四日、竹友会主催の特別演奏会は、函館市公会堂で開催された。六年ぶりに二度目の訪函となった荒木古童は、社中の堅実な発展ぶりに驚くとともに、一層羊童に対する信頼を厚くした。当時、荒木派の勢力が東京周辺に限られていただけに、門人達のことは詳細に至るまで常に自分の目で確かめることが出来てはいたが、東京から遠く離れた北海道で活躍していた長谷川羊童社中のことについては、年一、二回童窓会の定演に出演する羊童を通じて知る程度にすぎなかったから、驚きようも大きかったであろう。

なぜかこの年、宗家を招聘しての大演奏会を終えた翌月の九月十六日、函館五稜郭事務所で竹友会主催の演奏会が開催されている。糸方に亀谷佐喜松などの賛助出演を得ての会であり、単なる合奏会とは思われない。推論の域を出ないが、荒木古童を招聘しての演奏会開催に伴い、羊童自身の昇格、又は門人の昇格があり、それを祝う会ではなかったか。

その後も長谷川羊童は、東京で開催された童窓会の定期演奏会に毎年のように出演を続けた。

昭和六年十月三日午後六時から丸の内の帝国ホテルで行われた第十八回定演では、一部のトリを努めた三世荒木古童の「玉かつら」のあと休憩を挟んで、百瀬芳童・木村士童の連管による「鹿の遠音」で二部が始まった。宮内岱童の「八重衣」に続いて、長谷川羊童は「末の契」を、箏川内茂登子、三絃福田喜久子で演奏した。その後、納富寿童の「残月」、荒木梅旭の「葵の上」でこの会の幕が下りた。

社中の強化

三世荒木古童を招聘しての演奏会には、社中強化の狙いがあったに違いない。毎年上京して東京の邦楽界に通じるとともに、童窓会の幹部達と対等に舞台を踏めるようになった長谷川羊童は、大きな希望を抱いたであろう。それは支部と社中という二つの組織を活用する考えによるものだったに違いない。まず最初の目標は自分自身が東京で通用する尺八家になることだった。そしてそれが実現しつつある今、次にしなければならないことは、社中の充実にあった。東京周辺には宗家を軸とした荒木派の地盤はあっても、直門が大半を占め、少数精鋭としての感が強かった。地方にあって長谷川羊童は、門人の育成に力を入れ、社中の勢力を伸ばすことで荒木派への貢献を目指したのであろう。

昭和六年十二月、瀧野歩童と佐々木正童の二人は、長谷川羊童の推薦を受け、童号を允許されている。また、翌七年十二月には新栄昌童が童号を許されるなど、その後は毎年のように社中に童号を持つ者が増え、社中幹部として組織強化に大きな力となった。

社中の基盤作りが順調に進む中で、長谷川羊童は地元の糸方に目を向けた。才能を持ちながら函館にいることで機会に恵まれない糸方に心を砕いた。昭和八年五月、長谷川羊童は童窓会定演の助演者として、地元の川内佐登治を同行し上京した。それまでは米川親敏・宮崎春昇・福田喜久子など東京で活躍する糸方に助演を依頼していた。従来の慣例を止め、川内佐登治を同行したというからには、それなりの力を認めたからであり、それまでは糸方の引き立てにより演奏していた羊童が、逆に羊童の力量で糸方を引き立てられる段階に至ったことを示している。

このことが契機となり、川内佐登治は昭

かつら　床山
板　坂
板坂又二郎
■店　〒130 東京都墨田区横川２丁目11番５号（斉藤ビル１階）☎(03)3621-0166
■自宅〒110 東京都台東区根岸２丁目21番17-601号☎(03)3875-6183

和十年三月羊童の願いどおり上京して渋谷区の金王町で教授を開始することとなった。

函館大火で被災

川内佐登治の上京は、単に大志を抱いてのものではなく、函館大火により町のほとんどが焼失したことにもよる。昭和九年春、函館で起こった火災は、折からの風に煽られて、市街地のほとんどを焼き尽くした。多くの犠牲者を出した函館大火は、悲報として全国に知らされた。恵比須町に住んでいた長谷川羊童も類焼で被災者の一人となった。被害を免れた末広町の巴川方に身を寄せた長谷川羊童は、すぐに立ち直って再建の道を切り開いた。

悲報を知った国風音楽奨励会の遠藤操琴は、昭和九年四月四日、北見劇場で函館火災義捐演奏会を開催し、その益金百二十三円を寄付している。

昭和九年五月、もとの恵比須町に住宅兼店舗を新築した羊童は、尺八教授を開始するとともに、十月の童窓会秋季定演に出演するため上京した。

昭和十年三月、芸仲間として親交深かった川内佐登治の上京に同行した羊童は、彼女の東京での教授開始を支援するため、知友の糸方を回った。

荒木派の分裂

昭和十年五月二日午後八時三十分、三世荒木古童は還暦を待たずしてこの世を去った。川内佐登治を世話して東京から戻ったばかりの長谷川羊童だったが、訃報を知って急遽上京し、葬儀に参列した。恒例により春季大会として、五月十八日帝国ホテル演芸場で予定されていた第二十五回定演は、宗家の他界により無期延期となった。

三世荒木古童の死は、荒木派の分裂という重大な事件を引き起こす要因となった。三世荒木古童の後継として、四男の梅旭が四世を継承したことを発端とし、荒木派は二つに分裂することになった。この分裂騒ぎは新聞報道でも大きく取り上げられ、三曲界にとどまらず広く国民の知るところとなった。

一周忌を終えた昭和十一年十一月十三日、東京麴町の軍人会館で、故三世荒木古童追善と銘打った第二十五回の童窓会定演が一年半遅れで開催された。追善演奏会とあって、この会には来賓として琴古流では兄弟弟子だった川瀬順輔と川瀬悌二が特別出演し、二部の最初に本曲「真虚鈴」を演奏して、会に華を添えた。また、都山流東京幹部会の倉川簫山と吉田磎山は、都山流本曲「夕月」を追悼演奏し、三世古童の尺八界における交友関係の広さを示した。

この時、北海道から唯一人参加した長谷川羊童は、十一月十日函館を出発した。会では他の会員とともに追善曲として本曲「虚空鈴慕」を演奏したほか、箏高橋栄清・三絃高橋松子で「須磨の嵐」を演奏し、残務整理を手伝って十一月二十三日に帰函している。

会の分裂騒ぎの最中ということもあり、三世古童の死後、最初に行われたこの会には四世荒木古童を継承した梅旭は出演しなかった。そのこともあって、主催は故三世荒木古童門下童窓会とし、直門だった有志が集まって会を開いた形式を取った。糸方には生前親交の深かった富崎春昇や今井慶松・中能島欣一・加藤柔子・富山清琴など邦楽界の重鎮が名を連ねて、名流大会のような豪華な顔触れとなった。

荒木派の大同団結

三世荒木古童の死後四年を経過した昭和十四年夏、吉田耕童・関和童・百瀬芳童など七名の理事が中心になり、荒木派の大同団結を目指し行動を開始した。具体的には荒木派の中枢として宗家総務部を設置し、宗家事務の一本化を図り、組織運営体制を確立しようとするものだった。こうした理事の提案を支持すべく、全国の童窓会有志が賛同宣言を発表したが、名を連ねた二十四名の一人として、函館の長谷川羊童も連著している。

時間の経過とともに会派の統合も可能となった昭和十七年、四世荒木古童の体調を心配していた長老格の山本友三郎らの尽力によって、統合の第一歩として合同演奏会が企画された。こうした動きの中、四世荒木古童は、昭和十八年に入って更に体調を崩していった。せめて定演には出演したいとの希望を持っていたのであろう、春季大会を延期してまで静養に励んでいたが、惜しくもその夏、七月一日午前〇時、自宅で急性肺炎のため四十二歳の人生にピリオドを打った。古童を継承してわずか八年の歳月だった。

長谷川羊童が出演した童窓会定期演奏会（三世古童存命中）

年月日	回数	会場	曲目	助演者
大正12年3月3日	不明	不明	不明	不明
昭和2年5月1日	9回	日本青年館	楫枕	不明
昭和2年10月9日	10回	朝日新聞社	若菜	箏米川親敏、三絃福田喜久子
昭和3年10月21日	12回	日本青年館	かざしの雪	箏木谷寿恵子、三絃宮崎春昇
昭和4年5月18日	13回	朝日新聞社	里の春	箏河田登宇子、三絃福田喜久子
昭和6年5月2日	17回	帝国ホテル	新娘道成寺	三絃木谷寿恵子・福田喜久子
昭和6年10月3日	18回	帝国ホテル	末の契	箏川内茂登子、三絃福田喜久子
昭和7年10月15日	20回	帝国ホテル	真虚鈴	

日本舞踊のお写真なら　（ポーズ、舞台）

藤本写真館

（各地出張撮影も致します）

〈スタジオ〉札幌市豊平区平岸4条4丁目 4-10 TEL821-3515 ●駐車場あります。

伝統芸能「北海道」のあゆみ

尺八篇その18

道東・道北から始まった 逸童派の普及

中島聖山

これまで琴古流に関しては、荒木派・川瀬派・鈴慕会などを取り上げ、北海道における黎明期を中心に述べてきたが、今回は琴古流逸童派について記述する。

牧野　逸陽

逸童派の誕生

琴古流逸童派の初代宗家河本逸童は、本名を見崎健次郎といい、明治十五年八月二十一日に名古屋で生まれた。恵まれない家庭に育った健次郎は、大阪のとあるお寺に小僧として預けられるなど、少年時代は苦労を重ねた。十四歳のとき、山本逸翁に師事して尺八の手ほどきを受けた。その後、村瀬三之助の系統を引く岡田魯山に入門し、琴古流本曲を学んだ。さらに愛知県を基盤に勢力を伸ばしていた、西園流の初代兼友西園にも師事するなど、幅広い修業を積んだ。明治三十年頃、当時尺八界で一世を風靡していた二代目荒木古童に師事し、荒木派の芸風をも身につけた。

明治四十四年二月十五日、結婚して川本逸童を名乗って、一派を成す志を立てた。その手始めとして、上原六四郎の邦楽理論を参考に、明清楽の拍子符点をベースにした尺八楽譜を考案して出版した。これは、自分の修業時代を顧みて、楽譜がなかったばかりに苦労したことを思ってのことだった。

東京上野の桜木町で「逸童派尺八講習会」を設立して独立した川本逸童は、門人の育成に全精力を傾注した。川本逸童の人柄であろう、門人の中には皇族の宮様もいて、逸童派は盛況を極めた。事情があったのであろうか、大正七年十二月二十五日に見崎逸翁と改名したが、翌大正八年七月五日には、更に河本逸童と改名している。

尺八講習会の隆盛

大正時代に入ると逸童派は全盛期を迎えることとなった。会員の数は一万人に達し、国内各地はもとより、満州・朝鮮・樺太などにも支部ができ、活発な普及活動が展開された。河本逸童は全国各地の支部をまわるため、五年の歳月をかけて行脚したという。

独立当時の月謝は、今のように金額が定まっていたわけではなかった。稽古場の入口に「次回は米・味噌・酒」などと、師匠がその都度生活に必要な品を書いていたので、それを見て門人達が適当に持参したという。

逸童派を支える吹き手として、池田逸漣・牧野逸陽・清水逸閑・今尾逸波などの名手を輩出した。池田逸漣は独自の楽譜出版を始めたことが原因で、後に逸童派から分離独立して、「尺八逸漣会」を設立した。

特に牧野逸陽・清水逸閑・今尾逸波の三人は、逸童派の三役と呼ばれ、逸童派の基盤作りに大きく貢献した。戦前、牧野逸陽は宗家の命を受けて、樺太の豊原に派遣されたが、戦後は東京支部長として名実共に逸童派の大黒柱役を果たした。昭和三年十月九日に樺太劇場で開催された、佐羅絲豊主催の琴友会演奏会に出演するなど、北海道の邦楽関係者とも縁が深かった。

牧野逸陽の門人だった清水逸閑は、高山市を本拠地として活躍するとともに、昭和二十六年四月には「尺八閑月会」を設立して活動の母体とした。

敗戦の色が濃くなった頃、河本逸童は上野桜木町の私邸を出て、新宿の三栄町に居を移した。そして、清水逸閑と妻の三人で会社組織を作り再出発した。しかし、新居が陸軍参謀本部の直ぐ前の高台にあったことから、米軍の爆撃を受け、一切の家財を焼失してしまった。その後、一時甲府に疎開したが、ここでも空襲を受け、不幸にも負傷してしまった。

優雅な邦楽の音づくりにご奉仕する

邦楽〈琴・三絃〉の店

川村樂器店

札幌市中央区南3条西2丁目(HBC三条ビル)　☎(代)221-4970

■営業時間／午前10時～午後7時／月曜定休日

●各種カードをご利用下さい。

傷ついた体を持って、生まれ故郷の名古屋に避難したが、ここで三度目の爆撃を受けた。昭和二十二年十一月三日河本逸童は名古屋の市営住宅で、波瀾に満ちた六十六歳の生涯を終えた。

関月会　前列中央・清水逸閑

二代目逸童の襲名

初代逸童亡き後は、気象台に勤務していた初代の実子である見崎弘和が、二代目河本逸童を襲名した。昭和四十一年六月五日、中日新聞社の後援により、名古屋市カーネーションホールで開催された襲名披露記念演奏会には、札幌の高崎逸風が北海道を代表して出演した。初代逸童没後、二代目襲名までの二十年近いの空白期は、逸童派発展の重要な鍵を握っていた楽譜を焼失したことと、ほぼ同時期に宗家を失ったという二重苦から立ち直るための、逸童派の混迷期といえよう。

この混迷の時代にありながら、逸童派の再建を夢見て組織の存続に尽力したのは、東京の牧野逸陽はじめ、名古屋の水谷逸城、高山の清水逸閑、岐阜の今尾逸波らだった。特に清水逸閑は、全国を行脚し組織の堅持に努めた。

昭和四十六年当時、逸童派尺八講習会は二代目宗家を中心に、二百五十名の会員を抱え、名古屋に本部を置くとともに、東京・高山・岐阜など全国に十七の支部を設置する組織にまで再建された。北海道では稚内と札幌に支部が設置され、先崎逸瓏が稚内支部長を、そして高崎逸風が札幌支部長を務めていた。

阿部羅逸鈴の稚内教室

高崎逸風は本名を末吉といい、大正十四年三月十四日稚内で生まれた。中学時代から管楽器に興味を持ち、進軍ラッパを吹いたりしていた。歯科医師を志していた彼は、日大歯学部を卒業後、東京医科歯科大学の専攻科に入学したが、ここで生田流箏曲をたしなむ同窓生と知り合いとなった。彼女を伴侶とすることを決意した高崎末吉は、昭和二十六年に専攻科卒業と同時に、彼女を伴って郷里の稚内に帰り歯科医院を開業した。

学生から社会人になったばかりの高崎末吉ではあったが、夫であり、医師であり、経営者であるという一人三役をこなす日々に身を投じることとなった。そんなある日のこと、初めて来院した沢井という患者さんが、風呂敷包みを大事そうに治療台まで持ち込んで、膝の上に置いていた。よほど大切なものなのだろうと思いつつ治療をしていたが、気になったので尋ねてみると尺八だという。少年の頃から楽器に興味を持ち、ラッパを独習して吹いていたし、夫人が生田流の箏を弾いていたこともあり、高崎末吉は治療が終わるのを待って話を続けた。すっかり心を引かれた彼は患者さんから尺八を借り、技巧室に入って吹いてみたところ、習いもしないのに「ポー」と良い音がした。聞いてみると沢井さんは、琴古流河本逸童派の阿部羅逸鈴の門人だという。高崎末吉は時間を作って、直ぐに阿部羅逸鈴を訪ね、入門を願い出た。

阿部羅逸鈴は逸童派三役の一人、清水逸閑の系統を引く飯利逸雲の門人で、金沢市で新聞記者をしていた。昭和二十五年頃稚内に転居し、尺八の専門師匠として教室を開いていた。高崎末吉が入門した当時、教室に通っていたのは五、六人だったという。こうして阿部羅逸鈴の門人になったものの、高崎末吉は開業医という仕事柄、毎週時間を決めて定期的に稽古に通うわけにはいかなかった。そこで、自宅を稽古場に開放し、週二回阿部羅逸鈴の出稽古を願い出た。開業して間もないこともあり、忙しい毎日だったが、熱心に稽古に励んだ甲斐があり、直ぐに初伝免許状を取得することができた。しかし、残念なことに高崎末吉が入門して二年ほどして、阿部羅逸鈴は稚内を去っていった。

先崎逸瓏が稚内教室を継承

阿部羅逸鈴が離稚した後、稚内教室は高弟だった先崎逸瓏が継承することとなった。先崎逸瓏は稚内出身で、当時の電電公社・稚内電報電話局に勤務するかたわら、尺八道を極めようと精進を重ねていた。高崎末吉は他の仲間たちとともに、先崎逸瓏に転門して尺八を吹き続けた。こうして先崎逸瓏から中伝免許状をもらった高崎末吉は、いよいよ尺八の魅力に引きつけられ、当時稚内で活躍していた山田流尾崎社中の賛助を得て、管野ホテルや市民会館で盛んに開催された合奏会に積極的に参加して腕を磨いた。

中央で活躍していた清水逸閑や池田逸蓮なども、来道の度に稚内を訪れ講習会を開くなどして、良い刺激を与えてくれた。特に池田逸蓮は昭和三十二、三十三年になって、楽譜出版を契機に逸童派から独立して逸蓮会を組織したこともあって、北海道の陣容を整えようと頻繁に来稚した。

しかし、先見の明を持った高崎逸風は、稚内の将来に見切りを付け、北の都・札幌への転居を考えていた。

道東・釧路に根づいた逸童派

釧路は北海道の尺八界にあって、最も早く組織化の地盤を作り上げた所である。先ず明治四十四年に琴古流の各派の有志が集って、同好会としての「八千代会」を設立した。初代会長を務めたのが福岡揚水だった。その後、

舞踊・演劇・テレビ・衣裳・小道具

松竹衣裳株式会社

東京店　東京都中央区新富２－２－８松竹新富ビル　電話03(3552)5921㈹〒104
大阪店　大阪市西区南堀江通り２－１－３　松竹大阪ビル　電話(538)1181㈹〒550
九州出張所　福岡市博多区中洲５－１－22　松月堂ビル内　電話(272)0141㈹〒810
北海道出張所　札幌市中央区南２条西６丁目　大友ビル　電話(011)219－0805〒060

舞踊小道具も営業いたしております。衣裳同様御用命をお待ち申し上げます。

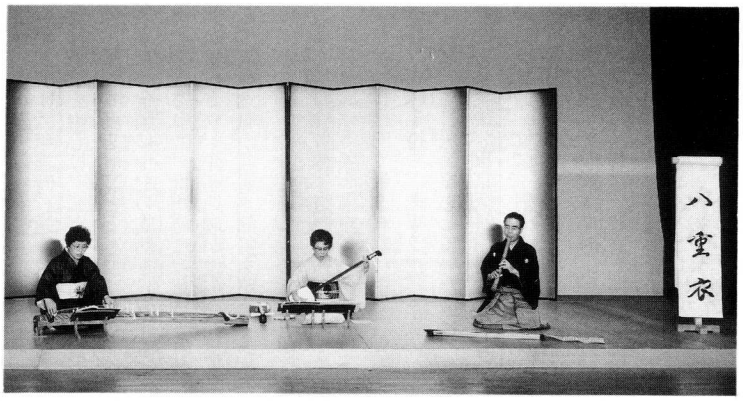
大正二年に二代目として山口藤太郎（後に都山流に転門し、山口珠山として活躍）が会長に就任し、続いて大正七年には佃重雄が三代目会長に就任している。逸童派に所属し活躍していた室井逸楓は、昭和九年に釧路琴古会の会長に就任している。

大正十二年に三曲協会の前身である「釧路邦楽普及会」が設立された。釧路市長の二木千年を会長とし、琴古流の佃重雄が副会長を務めて、糸方の横田慶勢・北条光子・北条操声など、主だった邦楽家が協力する形で会は運営された。釧路八千代会の会員となった室井逸楓は、門人を伴って積極的に舞台を踏んだ。昭和五年九月二十七日に釧路市公会堂で開催された八千代会の演奏会には、門人若月逸逃らを連れ出演している。また、新しいものにも積極的に立ち向かい、大正時代に流行しだした七孔尺八に手を染めたりもした。翌昭和六年六月六日には、八千代座で七孔尺八の演奏会を開いている。既存の組織から脱却し、独自の活動母体を求めていた室井逸楓は、昭和七年に「逸楓会」を設立した。そして、同年六月四日に商工会議所のホールで、第一回目の逸楓会の演奏会を開催した。発会を記念して開催したこの会が成功したのであろう、三か月後の九月二十三日に、今度は釧路市公会堂で逸楓会の演奏会を開催している。翌八年五月十三日にも同様の会を開催したが、十月十五日には札幌から佐薙岡豊を招聘して、特別演奏会を開催している。樺太にいた牧野逸陽から天才箏曲家・佐薙岡豊のことを聞かされていた室井逸楓は、佐薙岡豊が昭和八年六月に樺太から札幌に転居し開軒したことを知って招聘したのであろう。会には黒沢佐登梅・松尾栄子・蛯子美都井など糸方各社中が賛助出演したほか、琴古流竹風会や都山流の伊藤龍捷（後の捷山）なども出演した。室井逸楓は佐薙岡豊を相手に「七小町」「春の海」「残月」の三曲を演奏し、邦楽の神髄を披露した。

こうして室井逸楓の活躍により、釧路に多くの門人を抱え、逸楓会は北海道で最も勢力のある逸童派の組織にまで成長した。しかし、室井逸楓が琴古流荒木派に転門し、昭和九年春に釧路琴古会を設立したことで、逸童派の勢力は一変してしまう。失った流勢を建て直そうと、宗家の命を受け昭和十年に宗家補佐役の今尾逸波が釧路に入り、一年半程指導普及に尽力したが地元の壁は厚く、願いをかなえることは出来なかった。

昭和四十年代から札幌を中心に発展

昭和三十八年に稚内から札幌に転居した高崎逸風は、師を求めて高橋是風の門を叩いた。高橋是風は国鉄の職員で、樺太時代に初代河本逸童に師事して逸童派を学んだ人だった。早速稽古に通い始めたが、高橋是風が指南免許を持っていなかったことから、昭和二十六年以降数度にわたって来道していた家元補佐役の清水逸閑に転門して、奥伝以降の免許状を取得した。昭和四十五年に師範に昇格すると同時に門人の育成を始めるとともに、札幌閑月会を組織して、高山市にある閑月会の支部機能を果たすようになった。更に昭和五十一年十月一日には大師範に昇格し、清風斉逸風を名乗って現在に至っている。



北海道琴古会　尺八・高崎逸風

昭和四十年代に生田流箏曲家・太田里子の系統を引く久郷幸枝に師事して、三絃を習ったことのある高崎逸風は、古曲の合奏を得意とした。准師範に昇格した際、高橋是風の推薦で北海道琴古会に参加し初舞台を踏んだ。小樽で開催されたその会では、高橋是風と一緒に高橋麗賀（高橋是風の娘）の糸で「明治松竹梅」を演奏した。

大師範昇格のときは上京し、川瀬里子の娘川瀬白秋の糸で「夕顔」を演奏している。

河本逸童の来道

逸童派の宗家・河本逸童が来道した記録がある。避暑を兼ねて来道したのであろう。大正十五年八月十四日、河本逸童と河本逸調の二人は、旭川商業会議所のホールで開催された、地元三曲同好会主催の演奏会に特別出演している。この会には地元の尺八愛好家として、吉村敦・阪口實・三浦信三郎らが出演した。この時、河本逸童は半月ほど旭川に滞在して講習などを行った。

都山流で活躍した伊藤彩山が、大正六年頃から旭川で琴古流河本逸童派を教えていた境という人物に、尺八の手ほどきを受けたといっていることから、旭川は道内で最も早く逸童派の根づいた所といえよう。しかし、池田逸漣の分派独立により、その後旭川は橋本逸笙を中心とした逸漣会の地盤となっていく。

逸童派の現況

札幌の高崎逸風をはじめ、稚内・苫小牧など十二人の有資格者が門人の育成に尽力し、逸童派の普及発展に努力している。

昭和五十三年七月八日に札幌市教育文化会館小ホールで開催された、第二十四回北海道琴古会定期演奏会には、今尾逸波が特別出演して「青柳」を演奏した。

かつら　床山
板　坂
板坂又二郎
■店　〒130 東京都墨田区横川２丁目11番５号（斉藤ビル１階）☎(03)3621-0166
■自宅〒110 東京都台東区根岸２丁目21番17-601号☎(03)3875-6183

伝統芸能「北海道」のあゆみ

尺八篇その19

都山王国の建設

戦後の混乱期を乗り越えて——

中島聖山

戦後、都山流は北海道の尺八界にあって、目ざましい発展を遂げた。大正から昭和にかけての黎明期には、琴古・都山・上田と互いに均衡のとれた勢力分布を維持してきたにもかかわらず、何故その均衡を破り「都山王国」と称される程、都山流が突出したのだろうか。同じ邦楽界でも箏曲界では宮城道雄のような、歴史的なヒーローが誕生して、全道の箏曲界に大きな影響を与えたにもかかわらず、山田流と生田流のバランスは保たれ、現在もなお均衡を維持している。

しかし尺八界にあっては、戦後の流れを汲んで、流人の数では現在でも都山流が抜きんでている。

今回は戦後の尺八界の牽引力として、大きな役割を果たした都山流の発展の様子と、中でも小樽幹部会の歴史について触れてみることにする。

北海道幹部会による組織の一本化

昭和二十年二月二十一日、北海道都山流の開拓者とも言うべき畑中康山が急逝した。宗家直門として、中央とのつながりを保ちつつ、北海道・樺太の都山流の発展に心血を注いでいた畑中康山の存在は大きかった。北海道の都山流にとって畑中康山の死は、小さな子供を抱えて厳父を亡くした家庭の如く、将来に不安を残した。

その年の秋、畑中康山に代わって評議員となった江部松山は、北海道幹部会設立の腹案を持って、旭川の伊藤彩山を訪ねた。実業家として活躍していた江部松山は、畑中康山亡き後、広大な北海道において都山流を普及発展させるためには、組織強化以外に方法はないと考えた。具体的にはそれまでの地方別に設置していた幹部会を統合し、北海道幹部会を設立して、幹部会長を頂点とする全道規模の組織を活動の母体とすることだった。

伊藤彩山の内諾を得た江部松山は、私財を投じて全道各地の幹部会を回り、設立準備の根回しに東奔西走した。こうした江部松山の努力によって、昭和二十一年定山渓温泉で、第一回目の北海道幹部会の会合が開催されることになった。

設立当時の役員及び地方幹部会は次表のとおりである。

役職	氏名	所属	会員数
会長	伊藤彩山	旭川	24
理事	金子繡山	札幌	39
〃	江部松山	北見	12
〃	飯田羨山	室蘭	7
〃	竹田侃一郎	函館	7
〃	横道康浩	釧路	5
〃	森康翠	小樽	5

昭和二十三年四月二十五日、洞爺の日鉄会館で宗家承認後初めての総会が、室蘭幹部会の飯田羨山の司会で開催された。

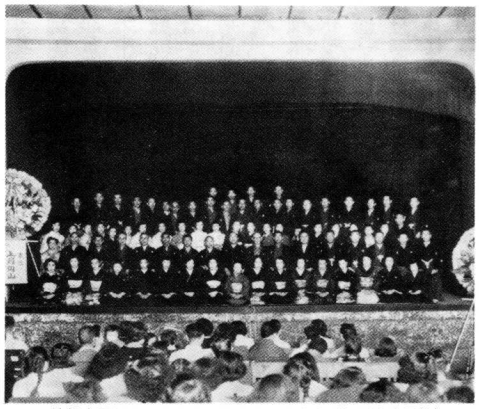
先ず議案の審議に先立ち、役員の改選を行ったが、会長ほか全員を留任とし、新たに顧問として阿部香山、相談役に江部松山を選出した。続いて会の運営について議論し、組織強化を図るため、奥伝以下の流人を包含する「北海道都山流人会」の結成を議決した。

こうした北海道の組織強化の動きは、第三十回評議員会の合意を得て、全国展開へと発展するとともに、やがては流組織の財団化へと進んでいった。

全道演奏会の継続的な開催

昭和二十三年九月十一日午後一時から、札幌の豊平館で第一回都山流北海道幹部会の演奏会が開催された。プログラムは全十二曲で、久保邦山指揮による「本曲・若葉」で始まった。「嵯峨の秋」「水三題」など各幹部会の演奏で盛り上がり、最後は北見幹部会の江部松山指揮による「佐渡の印象」で締めくくられた。

それまで各幹部会が地元の糸方の協力を得て、独自に開催していた演奏会を集大成する形で行ったこの演奏会は、その後毎年開催さ



流祖中尾都山先生喜寿祝賀全道大演奏会（旭川市公民館）

優雅な邦楽の音づくりにご奉仕する

邦楽〈琴・三絃〉の店

川村樂器店

札幌市中央区南3条西2丁目(HBC三条ビル) ☎(代)221-4970

■営業時間／午前10時～午後7時／月曜定休日

●各種カードをご利用下さい。

れ、北海道幹部会設立による組織の一本化と相まって、都山流発展の大きな要因となった。またこれにより同じ都山流を学びながら所属する幹部会が違うため、顔を合わせることのなかった流人たちが一同に会することとなり、いい意味での刺激となった。

第二回目の演奏会は、昭和二十四年六月十九日午後〇時三十分から、小樽市公会堂で開催された。全道から竹方、糸方が集まるとあって、前人気もよく八百人の聴衆が押し寄せる盛況だった。

先ず久保邦山会長の挨拶があり、続いて出演者全員による「本曲朝の海」の演奏で始まった。北見幹部会の「高麗の春」、地元小樽幹部会の「臼の声」「新浮舟」など、各幹部会の熱演が続いたが、特に人気を博したのは暗譜で演奏した江部松山の「ままの川」であろう。

こうして都山流発展に大きな役割を果たした北海道幹部会の定期演奏会は、昭和五十一年の都山流分裂まで、開催地を変えつつ毎年継続して開催された。

なお、二十回目までの開催状況は次表のとおりである。

回	年月日	会場	記事
1	昭23・9・11	札幌豊平館	
2	24・6・19	小樽市公会堂	
3	27・9・7	旭川市公民館	
4	28・6・14	北見市公民館	宗家喜寿祝賀記念
5	29・9・12	室蘭知利別会館	
6	30・9・24	釧路市公民館	
7	31・9・16	札幌中央創成小学校	都山流創始60周年記念
8	32・9・15	小樽市公会堂	
9	33・11・16	旭川市公会堂	
10	34・9・20	北見市中央小学校	
11	35・9・18	室蘭市民会館	
12	36・9・10	釧路市公民館	
13	37・9・2	札幌自治会館	島原帆山、星田一山ほか特演
14	38・9・8	小樽市公会堂	島原帆山、宮下秀洌特演
15	39・9・6	旭川市公会堂	池田静山特演
16	40・9・13	名寄市民会館	都山流創始70周年記念
17	41・9・18	北見市民会館	中尾都山、島原帆山特演
18	42・9・15	室蘭文化センター	
19	43・9・8	釧路市公民館	
20	44・9・14	小樽市民会館	

ラジオを媒体とした活動

昭和三年六月五日、NHK札幌ラジオ放送局が開局した。呼称はおなじみのJOIKである。

午前十一時から札幌市公会堂で開催された開局式の模様は、すべてラジオ放送された。放送開始日の邦楽番組は、清元・浄瑠璃・長唄で、三曲合奏は翌日の六月七日に放送された。曲は「楫枕」と「雲井の曲」で、畑中康山の尺八、中徳鳳琴の箏だった。

また、三日目の六月八日には、新日本音楽と題して、宮城道雄作曲の「コスモス」を歌・上元絹枝、尺八・藤沢鈴昭、箏・吉井光江で放送し、「谷間の水車」を尺八・藤沢鈴昭、箏・吉井光江で放送した。更に「舟唄」を藤沢鈴昭の指揮で、琴古流鈴慕会の有志十七人が演奏し、都山流では畑中康山が「岩清水」を独奏するなど、邦楽の真髄を披露するとともに、開局記念放送に華を添えた。

昭和六年六月、NHK札幌放送局は開局三周年を迎え、様々な記念番組を放送した。この時も地元の邦楽家達による録音放送が、ゴールデンタイムを飾った。一週間にわたる記念番組として、初日の邦楽番組は謡曲「羽衣」で始まり、尺八博士で有名な北大の松村松年の尺八独奏で締めくくられた。松村博士は愛用の二尺管で得意の古典本曲である「奥州鈴慕」「里神楽」「阿字観」の三曲を独奏して、聴衆に深い感銘を与えた。川瀬順輔をはじめ、多くの尺八演奏家との親交を得て、尺八三昧の生活を送っていた松村博士は、この録音放送を最後に、公の場での演奏にピリオドを打った。

札幌放送局JOIK初期の放送風景

札幌から始まったNHKのラジオ放送も、函館・小樽・北見・室蘭・釧路と各地の開局により、ほぼ全道をネット出来るように発展した。また、北海道放送の開局に伴って民放も加わり、一層充実したラジオ放送が提供されるようになった。

昭和二十七年から二十八年にかけての二年間に北海道で放送された邦楽番組（都山流関係分に限る）は、実に三十回に及んでいる。各幹部会ともラジオ放送には積極的に取り組み、ローカル番組の充実に大きな役割を果たした。特に北見幹部会は地元の放送局に働きかけし、二年間で延べ十三回の放送を行った。

地元の邦楽家が放送していることもあり、聴衆の人気も高く、ラジオ番組を聴いて入門してくるものも多数いた。

小樽の発展

港街として栄えた小樽の都山流は、高根致山・金森剛山・森翠山と受け継がれ、現在の姿に発展してきた。

伝統という名の幹。

この豊かな北の大地に育って102年。
伊藤組土建は、いつも時代の先の
新しい標的に挑戦しつづけてきました。
その試みが、いま確かな"伝統"となり、
次代への遺産を築いているのです。

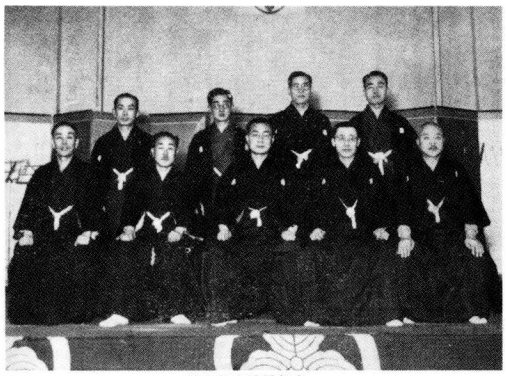
伊藤組土建株式会社

そもそも小樽での都山流の普及は、大正十五年三月に指南免許状を取得した、畑中康山門人の中桐康薫と中桐康遙兄弟が、教授を開始したのがその始まりだとされている。教授開始当時に入門した人としては、専売公社の浅地康楠等である。中桐兄弟の滞樽は短かったのか、その後の活動を記録するものがない。

昭和三年春に高根致山が帰樽し、盛んに演奏活動を始めたことで、都山流は大いに普及した。というのも、彼が大正十年早稲田大学在学中に、宗家直門として全国的にも名の知れた倉川簫山に師事し、東都会の達人とまで呼ばれる程の実力者だったからだ。生田流箏曲の師範だった文子夫人と協力して邦楽の魅力を存分に披露したこともあり、にわかに都山流の基盤が確立した。昭和三年秋に高根致山が主催して都山流だけの演奏会を開催したが、これが小樽における都山流の最初の演奏会だった。

高根致山は唄物を得意としたが、新曲にも意欲的に取り組んだ。しかし、愛娘の追悼演奏会を最後に舞台を踏まなくなった。

大正九年一月の畑中康山の来札と同時に入門した金森剛山は、夕張の北海道炭鉱汽船会社を退職し、昭和六年から小樽の大上商船に入社した。彼は小樽に転居するや、康琳会小樽支部を結成して自ら支部長となり、都山流の普及発展に力を注いだ。そして、仕事を終えた後は、酒と尺八に没頭する日々を送った。社中の組織として「剛風社」を結成し、今井派の芦野春井、須田、北岡、瀧口、沖崎の各師と合奏研究を重ねた。作曲もし、多くの作品を残している。また、萩岡派の平川岡千代、吉川好恵等と新曲の研究をするなど幅広い活動を行った。昭和十二年には東京から町田嘉章を招聘して、新日本音楽を標榜する演奏会を企画実施した。これが契機となり、伶名音楽会小樽支部長を務めたりもした。


都山流小樽幹部会

門人の育成に尽力したこともあり、南部偲山、亀井把山、西村谷山、金森剛堂、中島剛稜、井上剛悠（後の文山）、森剛翠（後の翠山）など、後の北海道幹部会を担う活動家を輩出した。昭和十四年に井上が准師範に登第したが、大黒柱の金森剛山が昭和十六年に他界したこともあり、活動は停滞した。昭和十八年の札幌検定試験では中島・森の両名が准師範に登第したものの、戦火激しさを増すばかりで、会は衰退の一途をたどった。

森翠山は浜屯別の育ちで、学校卒業後は地元の三井木材に勤務した。幼少の頃から尺八の音色が好きだった彼は、地元に師匠が居なかったこともあり、昭和三年十七歳のときに家庭音楽会の講義録を取り寄せて、尺八を独習しはじめた。昭和十年に小樽の坂本製材に職を得て転居した彼は、金森剛山に師事して本格的な修業を重ね、持っていた才能を充分に発揮した。

戦後間もない昭和二十二年には「康風会」を組織し、門人の育成に努力した。昭和二十四年には外地から引き揚げてきた高根致山の発案で、都山流の流人が集まり「都友会」を設立した。高根致山を初代の会長とし、副会長には森翠山が就任した。西川景坡と天坂聚山の二人が相談役となり、会計は小林泉山が担当した。こうして小樽の都山流も戦中・戦後の混乱期を乗り越え、一本化の方向へと動きはじめたのである。翌昭和二十五年には第二回目の北海道幹部会の定期演奏会を司会することとなった。この会の成功と、児玉翠簫（現在の簫山）・天坂翠鳳（現在の烽山）の両名が准師範に登第したこともあり、組織・陣容ともに体制が整い、名実共に小樽幹部会の再建が成された。

都山流尺八演奏会　札幌幹部会

昭和二十七年の流祖中尾都山喜寿記念に際し、特別昇格があった。この時北海道からは後藤夢山・唐牛錦山・森翠山・佐々木綃山の五名が業績を評価され大師範に昇格した。この時森翠山は次のように謝辞を述べている。

『顧るに不肖斯道を愛好して二十七年、ひとつの宗教と心得、単に技術の錬磨のみならず、人格の円熟と向上に資してこそ意義あるものと信じ、精進している心算でありますが、いつもその思慮が念頭にあると言うのみで、何等向上を見ていないことを感じ、不徳のいたすことと深く恥入っている次第であります。（後略）』

この挨拶文を見ただけでも、森翠山の人格と芸道に真正面から立ち向かう真摯な態度をうかがい知ることが出来る。こうした森翠山の人と形はそのまま尺八の音に現れ、聴く者の心を打った。

昭和三十三年から二期四年間、高根致山は評議員を務めたが、この時も森翠山は選挙事務長として、陰の力となった。昭和三十七年七月十日高根致山は、宗家から都山流最高の称号である竹琳軒冠称の允許を受けたが、それも虚しく六日後の七月十六日、市の祭典で賑わう中、六十二歳の生涯を終えた。

日本舞踊のお写真なら　（ポーズ、舞台）

藤本写真館

（各地出張撮影も致します）

〈スタジオ〉札幌市豊平区平岸4条4丁目 4-10 TEL821-3515 ●駐車場あります。

新日本音楽の潮流に乗って

中島聖山

これまで十九回にわたって、本道における尺八界の歩みを辿ってきた。流派にこだわることなく、北海道の尺八界全体を視野に入れ、後世に書き残しておきたいと思う出来事について、記録の裏付けを取りつつ書いてきたつもりである。

新開地である北海道も、現在では既に三世代目が活躍する時代になり、明治から大正・昭和にかけての本道尺八界について、語れる人がほとんどいなくなった。

そもそも今回のシリーズを手掛ける動機となったのは、歴史が浅いといわれる北海道ですら、あらゆるジャンルで先人達の貴重な足跡が消え始め、歴史を辿ることが難しくなってきていることから、せめて邦楽の中でも尺八のことについて、先人達の足跡を辿り、可能な限り書き留め、記録として残しておきたいと思ったからである。

こうした動機で始めたこともあり、これまでの記述は、全て明治から昭和初期にかけての、各流派の北海道進出から定着までに限定し、黎明期に的を絞った形となった。

戦後から現代に至る発展の様子については、どの流派も語れる人がたくさんいるし資料もあるので、後日誰かが書き留めてくれると思っている。

シリーズを終えるにあたって過去の記述を読み返してみると、まだまだ内容的に浅く、手を加えたい心境にかられるが、時間のない中での取り組みであり、資料探しから始めなければならなかったので、いつも原稿締切りを守れず、発刊の足手まといになっていたことを考えると、妥協せざるをえなかったのかとも思う。いずれにしても機会を改め、納得の行くものに仕上げたいと思っている。

主旨に深い理解を示し、二十回にわたって貴重な誌面を割いてくれたアドビューローの竹内氏に、心から感謝を申し上げたい。

尺八音楽の変遷

明治以降の尺八音楽は、大きくとらえて三つに区分できる。

普化宗の虚無僧達が法器として吹簫禅に使用していた尺八が、楽器として扱われるようになったのは、明治四年のことである。普化宗の廃宗に伴って、尺八の生命までが絶たれてしまうことを恐れた吉田一調や荒木古童らが、文部省に嘆願して、楽器として演奏する許可を取り付けたことに端を発するからである。

従って当初は既存の三曲合奏に後から加わる立場であり、箏または唄のために作曲された、いわゆる古曲の胡弓のパートを尺八で演奏するものだった。

その後、多くの尺八家達の手によって、古曲に対する尺八の手付けが成されたが、いずれも演奏形態上は、明治初期と変わるものではない。この時代の尺八は、唄・箏さらには三絃の編成で完成された曲の中に割り込んだ形であり、尺八独自の役割を担っているものではなかった。

以上が第一期といえるだろう。

大正九年十一月二十七日、東京は丸の内の有楽座で、本居長世と宮城道雄の作品を扱った演奏会が開催された。「新日本音楽大演奏会」と銘打ったこの会には、作曲者は勿論のこと尺八家の吉田竹堂（後の晴風）夫妻始め、声楽家や洋楽器演奏家などが出演した。

この会の評判はよく、新しい時代の邦楽として新聞でも大きく取り上げられた。その後は宮城道雄の作品を中心に「新日本音楽」という言葉が使われ、全国的に流行することとなった。

宮城道雄の作品は、西洋音楽の影響を強く受け、リズムやメロディーがはっきりしていた。尺八を吹くこともできた宮城道雄は、自

晩年の吉田晴風

昭和４年　納戸町宮城宅にて（左から）宮城道雄・吉田恭子・吉田晴風

優雅な邦楽の音づくりにご奉仕する

邦楽〈琴・三絃〉の店

川村樂器店

札幌市中央区南3条西2丁目（HBC三条ビル）☎(代)221-4970

■営業時間／午前10時～午後7時／月曜定休日

●各種カードをご利用下さい。

作の中でメロディー楽器として尺八を大いに活用した。こうして新日本音楽と呼ばれる作品によって、尺八はそれまでの従属的な立場を脱却し、箏・三絃・十七絃と対等な地位を獲得するとともに、パートとしての役割を果たすこととなった。

これが第二期であろう。

昭和三十年代に入ってからは、邦楽四人の会や尺八三本会、新日本音楽集団などが中心になって、「現代邦楽」と呼ばれる新しいスタイルの音楽を盛んに演奏した。

これは長い間続いた宮城新曲からの開放を目指すとともに、より深く西洋音楽と関わりながら、邦楽器の可能性を探ろうとする動きでもあった。

現代邦楽の作品では、楽器の特徴を極端なまでに追求するものが多く、尺八は重要な役割を果たすことになった。諸井誠の作品である「竹籟五章」や「対話五題」、武満徹が尺八と琵琶のために作った「ノヴェンバー・ステップス」などでは、尺八が主役を演ずることとなった。

古典本曲の世界では論を待たずに主役だった尺八が、普化宗の廃宗に伴って三曲合奏の中で従属的立場から再出発し、対等な立場を経て、また主体的な立場へと浮上してきたのである。

今回は尺八の立場を変える引き金ともなった、新日本音楽と北海道尺八界とのかかわりについて辿ってみることにする。

関東大震災の答礼使節

吉田晴風が「新日本音楽」と銘打って、北海道で初めて演奏会をひらいたのは、大正十二年秋のことである。

大正十二年九月一日、関東大震災が首都東京を直撃し、大災害へと発展した。この時、世界中から救援物資が届けられ、アメリカからも多くの物資が届いた。吉田晴風はその返礼として、日本の音楽使節をアメリカに派遣することを企画し、報知新聞社に持ち込んだ。当時の金で一万円もかかる費用を、主催者である報知新聞社には負担させないとの吉田案は、ただちに重役会議に付議され承諾された。費用は「新日本音楽」と銘打って、全国各地で送別演奏会を開催し、その入場料収入で捻出しようとするものだった。震災を逃れて宮城道雄が韓国に行っていたこともあり、吉田晴風夫妻を中心とする八名の訪問団が構成され、北は東北・北海道から、南は名古屋・大阪で報知新聞社主催の「遣米答礼音楽使節団」送別演奏会が開催された。

震災に対する国民の関心が高かったこともあり、この演奏会はどの会場も超満員の盛況で大成功を収めたのである。と同時に、東京で始まった新日本音楽運動が、地方への広がりを見せ、急速に発展するきっかけともなった。

大正十二年十二月二日、東京を出発した使節団一行は、ハワイ・アメリカ本土を巡演し、翌大正十三年三月三十日、横浜に帰ってきた。

この事業の成功により、吉田晴風は報知新聞社との関係を深くした。大正十三年の夏、報知新聞社は渡米の報告も兼ねた演奏会を企画し、吉田晴風に依頼して、反響の大きかった北海道と九州で「新日本音楽」を紹介した。

こうして二年続けて吉田晴風が渡道したこともあり、北海道各地で新日本音楽に対する関心が高まった。中には入門を希望する者も多く、吉田夫妻と北海道邦楽界との結びつきが生まれた。

吉田晴風と北海道

大正十四年七月下旬、琴古流鈴慕会の藤沢鈴昭の強い要請を受け、吉田晴風は新日本音楽の講習を目的に札幌を訪れた。自作の作品や宮城の作品を普及させるためだったが、滞在中に演奏会も行われた。

報知新聞札幌支局の主催で行われた「音楽舞踊の会」は、八月一日と二日の両日、エンゼル館で開催された。演奏会では本居長世の作品が取り上げられ、本居みどりの唄、本居貴美子の舞踊が中心となった。吉田晴風は古典本曲「恋慕」と「流れの潮」を独奏し、会に華を添えた。

大正十二年秋から毎年来道していたこともあり、札幌を中心に新日本音楽を支持する動きが出てきた。竹方・糸方ともに熱心だったが、特に琴古流鈴慕会の藤沢鈴昭が本物で、新日本音楽協会北海道支部を引き受け、自ら演奏会や講習会の企画にあたった。

昭和二年、ソプラノ歌手の永井郁子が札幌で独唱会を開催したが、この時藤沢鈴昭は吉田晴風の紹介で、宮城道雄の作品を高橋文子と伴奏して人気を博した。

新日本音楽協会の支部事務局を担当していた藤沢鈴昭は、小樽・札幌の邦楽家に声を掛け、吉田晴風夫妻とソプラノ歌手・佐藤千夜子を招いて、支部主催の演奏会を企画した。昭和二年十月十四日の小樽倶楽部での演奏会の後、一行は十月十六日に札幌の今井記念館で昼夜二回の演奏会に出演した。

吉田晴風夫妻が渡米して絶賛を博したとの前宣伝もあり、市民の反響は大きかった。当日の演奏会には、藤沢鈴昭の呼びかけもあり、地元から藤沢鈴昭のほか都山流の畑中康山や糸方の中徳検校・渡辺輝美井・横山光喜勢・竹中賀寿井などが出演して会を盛り上げた。

この時、吉田晴風は自作の「小川のほとり」「かもめ」などのほか、宮城道雄の作品である「清水楽」や「春の夜」などを吉田恭子の箏で演奏した。

また、同行した佐藤千夜子は、中山晋平や本居長世の作品をピアノ伴奏で歌い、吉田夫妻の伴奏で「コスモス」「せきれい」など宮城道雄の作品を歌った。

地元邦楽家の全面的な支援を受けて実施したこの会は、大成功に終わった。

新日本音楽の定着をみた札幌で、翌昭和三年七月十二日には、新日本音楽協会主催の永井郁子慈善独唱会が公会堂で開催された。この時も藤沢鈴昭は、「若水」「せきれい」など宮城道雄の作品に尺八伴奏を行い、「新日本音楽の藤沢」を印象づけた。

昭和五年六月にも吉田夫妻は北海道を訪れ、札幌を始め全道各地で演奏会や講習会を開いている。

この時代の面白いところは、琴古流の藤沢鈴昭が盛んに新日本音楽を取り上げ、舞台に

舞踊・演劇・テレビ・衣裳・小道具

松竹衣裳株式会社

東京店　東京都中央区新富２－２－８松竹新富ビル　電話03(3552)5921㈹〒104
大阪店　大阪市西区南堀江通り２－１－３　松竹大阪ビル　電話(538)1181㈹〒550
九州出張所　福岡市博多区中洲５－１－22　松月堂ビル内　電話(272)0141㈹〒810
北海道出張所　札幌市中央区南２条西６丁目　大友ビル　電話(011)219－0805〒060

舞踊小道具も営業いたしております。衣裳同様御用命をお待ち申し上げます。

乗せていることである。本来、宮城道雄の作品は都山流の得意とするところで、新日本音楽運動も、畑中康山が中心になって推し進めるのが自然であった。琴古流の藤沢鈴昭が、新日本音楽協会の支部事務局を引き受けて、具体的な活動に取り組めたのも、東京から遠く離れた北海道だったからかも知れない。

戦時下の新日本音楽

昭和十三年七月十六日から約二週間にわたって、北海タイムス社主催の「国粋芸術の夕」が全道各地で開催された。これは応召軍人家族や戦没者遺族、並びに傷病兵士などの慰問を目的として企画されたものだった。

北海タイムス社の招きを受けた吉田晴風夫妻を始め、花柳徳兵衛など一行十人は、七月十三日に東京を出発した。

七月十五日、函館での公演を終えた一行は、列車で札幌へ向かい、十六日午前七時四十分に札幌駅に降り立った。旅館で着替えを済ませた一行は、休む間もなく月寒陸軍病院へ向かい、午前十時から約一時間にわたって慰問の公演を行った。娯楽室に集まった白衣の傷病兵士を前に、河本事業部長の挨拶に続いて、吉田晴風は慰問の言葉を述べた。

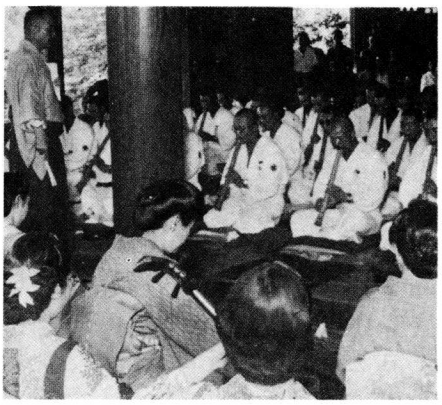
吉田晴風は自作の「かもめ」「小川のほとり」「子守唄」を婦人の箏で演奏した。また、花柳徳兵衛・孝兵衛・福本新らは「二つ面」「浮かれ獅子」「三番叟」などを踊った。最後は晴風の「江差追分」独奏で締めくくられたが、集まった兵士達の拍手は鳴り止まなかった。午後からは定山渓療養所でも同様の慰問が行われた。

そして、夜七時からは札幌市公会堂で、戦没者遺族慰安のための公演が行われた。この会は一般市民も対象にしたことから、会場には千五百人が詰めかけ、超満員となった。

三部構成で行われた「国粋芸術の夕」は、花柳徳兵衛の長唄「松の緑」で始まった。続いて地元の青沼きよし、曽波初子の清元「四君子」などが披露された。

二部では吉田晴風夫妻による「山村の水車」「春謳歌」などの演奏があり、万雷の拍手を受けた。

札幌のあと一行は小樽・室蘭・旭川・帯広・釧路・根室でも同様の公演を行い、旭川陸軍病院や層雲峡療養所では慰問を行って二十八日に帰京した。



白衣傷痍軍人の合奏研究会（昭和14年）

大戦も終末に近づいた昭和十九年八月、大日本芸能会主催で軍事保護院後援の傷病軍人療養所慰問巡演が企画された。メンバーは吉田晴風夫妻ほか舞踊家など四名で、八月八日に東京を出発した。

先ず日立・仙台など東北公演をしたあと北海道に入り、全道各地で慰問を行った。札幌では定山渓の北海道第二療養所と陸軍病院を訪問し、室蘭では産業戦士の慰安を行った。

昭和16年２月満州（中国東北部）慰問演奏旅行（左から３人目）吉田晴風

藤沢鈴昭から唯是想山へ

藤沢鈴昭が琴古流本来の古典に戻り、新日本音楽運動から次第に離れていった後、都山流の唯是想山が久本玄智の作品なども取り上げ、更に幅広い活動へと発展させていった。

昭和十一年二月十一日に札幌市公会堂で開催された建国祭記念の邦楽演奏会で、唯是想山は「新日本音楽」と題して久本玄智作曲の「美しき春」を、箏・唯是菊枝、唯是禮子で演奏した。

また、昭和十五年二月十一日の第十一回建国祭記念音楽会では、宮城道雄の「満州調」を取り上げ、箏高音・唯是菊枝、唯是智子、箏低音・唯是禮子で演奏した。尺八は一部・唯是想山、中川康流、朝妻康奏、二部・植村想淳、岩館想波だった。

更には同十五年十二月十五日に札幌邦楽連盟主催で行われた、紀元二千六百年記念邦楽演奏会で、町田嘉章の「佐渡の印象」を唯是想山の指揮で演奏した。この曲はフルート、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ等の入る大合奏曲だが、尺八は一部を朝妻康奏、中川康流、片岡想敏、東野康風、中津川都庭、松橋想水、二部植村想淳、岩館想調、高沢想曙で演奏した。

札幌三曲協会が設立された一か月後の昭和十八年八月二十九日、札幌の鉄道集会所で建艦献金の三曲演奏会が、札幌三曲協会主催で行われた。

この時、唯是菊枝は社中として新日本音楽「御代の祝」を演奏したが、尺八は山上熊郎、東野康風、牧野康遼、横道康浩の四名で、唯是想山と一門の名はなかった。

●

以上をもって未完ながらシリーズを終えたいと思います。

五年間のご愛読、心から感謝申し上げます。

（中島　聖山）

舞踊小道具
舞台美術

近江屋

札幌市東区北36条東４丁目
☎ (011) 731－6866